

平成10年度
公開講座概要

総合研究所が担当する平成10年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は19年目を数え、「まちをつくる・まちをまもる—世界文化遺産のあるまち・奈良—」をテーマに開催、受講申し込み者は、211名で、全5回の講座に、延べ693名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、143名の申し込みで、延べ664名が受講し、都祁村教養講座には69名の申し込みで、213名の受講があった。

また、11回目の社会学部公開講座は、「これからの日本を読む！」をテーマに開催し、93名の聴講があった。

桜井市生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう
—郷土を学び新しい時代を知る—

5月10日

高齢化と家族関係

松井春満

余程意図的に悪いことをしている人でない限り、人間は誰でも結構、真面目に生きている。それなのに、世の中、人間関係には、もめごとや争いごとが絶えない。狭い日常生活の中だけでなく、国家のレベル、国際間のレベルでも、対立が絶えない。誰しものが自分が正しくて、相手が間違っていると思っている。仏教では、六根（五感および心）に迷いの根があって、人間の迷妄がそこに生まれると考える。これを近代的な学問の立場からいうと、人間はみんな自分の思考の枠組み（パラダイム）から容易に離れられないということなのである。科学も芸術も宗教も日常考えることでも、すべてそうなのである。世の中の対立はそこから起こる。そこで…。

幼児はどんな考えをもち、高齢者はどんなものの考え方、感じ方をするのだろうか。

一体人生の歩みとはどんな特徴を持つのだろうか。思考の枠組みが違い者同士が仲良く理解しあうのは中々難しいものだが、とくに高齢社会になる中で違い世代の者が共生していくためには、各人がどうすればよいのだろうか。そんなことを考えてみたい。

6月14日

家族変動とライフスタイル

— 家庭のない家族の時代 —

東山弘子

若者も高齢者も女性、男性、父親、母親、幼い子どもたちもみな、家庭外のなんらかの集団やシステムと結びつき、心を家庭外に向けて暮らす社会が出現し、家庭の機能は大幅に縮小した。しかし、私たちの心にとって今もお家族・家庭が大切な心のよりどころとして求められている。そのギャップを埋めるものは、既成観念による家族幻想であった。空洞化した核家族、潜在的に崩壊した家族、登校拒否や家庭内暴力による子どもの反乱等はマイナスのように見えながら実は新しい家族と個人の間を産むプラスの可能性を秘めている。このような現象を臨床心理学的視点、心理療法的視点でとらえながら、新しい家族の可能性とライフスタイルについて考える。

7月12日

国際交流の現場から

田中良

私の家には6年前から毎年、5月に一人のフランス人学生が2週間ほど滞在します。これは、大阪府と私の住んでいる枚方市が提携して行っている国際交流事業の一環です。これまで6人の学生を受け入れましたが、彼らと2週間同じ屋根の下で生活していて最も感じることは、フランス人でもそれぞれ、ということです。一般にフランス人は、おしゃれで、陽気で、おしゃべりで…などと考えられがちですが、そうした考え方がいかに浅薄なものであるかがわかります。つまり、彼らはフランス人である以前に、固有の考え方と個性を持った一人の人間であるという当たり前のことに行き当たるということです。その当たり前のことを理解すること、そこに国際交流の原点があるように私には思えます。

9月13日

シルクロードの隊商都市・パルミラの碑文を読む

酒井龍一

奈良県シルクロード学研究中心（樋口隆康所長）は、1990年以来、毎年、遠くシリア砂漠中央に所在する有名な隊商都市・パルミラ遺跡の発掘調査を実施している。既に、砂漠下に華麗な宮殿墓などを発見し、その発掘が着々と進行していることは、報道や報告会などによって皆様方もご存じであろう。

実際に調査隊の中心となるのは、泉拓良隊長（奈良大学文化財学科教授）と西藤清秀（奈良県橿原考古学研究所主任研究員）で、その時々に応じて、形質人類学者や彫刻の専門家など、様々な隊員が加わることになる。碑文解説係として参加した私は、パルミラ研究の第一人者の小玉新次郎副団長（関西学院大学名誉教授）や現地のハレド＝アル＝アサド・パルミラ博物館館長などの支援を受けながら、全くの初歩からパルミラ語やそれが属するアラム語（キリストが喋っていた言語と言われている）の学習をすると共に、実際に出土した碑文や列柱道路や墳墓などに現存する様々な碑文の解説を行ってきた。

今回の講座では、全く馴染みのないパルミラ文字の碑文をどのように読み解いていくのか、その体験談を興味深く紹介することになる。

10月18日

情報化社会と現代人

横田浩

現代は情報化社会であるといわれて久しい。いたる所で、コンピュータだの、インターネットだの、マルチメディアだのという言葉聞く。

これらはいったい何なのであろうか？これらはほんとうに生活を豊かにするのだろうか？3年前のWindows95騒動は、いったい何だったのだろうか？

日々、新製品として発売される商品は、ほんとうに使いやすくなっているのだろうか。

このような「情報」が氾濫する中で、「現代人」である私たちはどうあるべきか？また、どう対処すべきであらうか？

もちろん、すぐに答えのだせないものばかりである。この講演会では、これらを考えるための話題を提供した。

1月24日

三輪山の伝承 — 〈うた〉と〈神話〉と —

上野 誠

ご当地、桜井での上野の万葉講座もはや4回目。これまで、たのしく、万葉を語らせていただきました。

今回は、カムナビとかミモロと呼ばれた三輪山の古代信仰について考えました。その古代の聖地は、どのように〈うた〉や〈神話〉に表現されているのか？教室の皆さんと考えました。

2月14日

“お水取り”を聴聞する — その伝承と意味 —

市川 良哉

水取りや こもりの僧の 沓の音（芭蕉）

江戸前期の俳人・松尾芭蕉（1644～94）は天平勝宝四年（752）にはじまると伝える東大寺二月堂のお水取りを聴聞しました。その厳肅な行法によほど感銘を深くしたのでしょう。この句からそれがジーンと伝わってまいります。お水取りが終わると本格的な春が訪れてくるといいます。この行法は正しくは「修二会」といい、「十一面悔過法要」ともいわれます。単なる季語に終わらせないで、この行法に関して伝えられることをたどりながら、その宗教的意味などを聴聞したいと思います。

3月7日

日本社会構造をよむ — 既成概念の崩壊 —

蘇 徳 昌

この100年の前半の50年は日本は「富国強兵」の下に軍事立国に努め、戦争を強行した。日清・日露戦争、21箇条要求、満州国、日中戦争、第二次世界大戦というふうに。後半の50年は「平等互惠・相互補完」の下に技術・加工立国に励み、貿易を推進した。NIES・ASEAN・中国等、その進み具合は前半の50年と同じである。いずれもアジアの震源地である。絶対主義が民主主義、財閥が系列会社になり、近代化を実現させ、経済成長を遂げたものの、対外的には一方通行型である。土台がそれに応じて変化したが、上部構造は受身的で、自主性がなく、前近代的な、旧態依然的な側面が多い。

都祁村生涯学習シリーズ

奈良大学教養講座

生活文化を考える — ゆとりと豊かさを求めて —

5月24日

“こころ”の変革

— 新しい世紀を前にして —

市川良哉

新しい世紀を前に、高齢化の時代は人間の問題をいよいよ浮き彫りにしつつあります。いろいろな面からの対応を迫られていますが、大きな課題の一つは何よりも“こころ”の変革が求められていることではないでしょうか。まず、それはどのようなことなのか考えていきます。つぎに、人間の“こころ”のうちに超越的な世界を開いた人たちの生き方をいくつか取り上げて、その心景を具体的にみていきたいと思えます。

7月19日

上手に年をとろう

小西正三

I. 老化とは

老化とは、年をとること（加齢）によって起こる身体活動、精神活動の低下のことです。

人は誰でも年をとります。生老病死、老いと死は避けることはできません。

(1) 細胞の死

壊死（ネクローシス）・枯死（アポトーシス）

(2) 個体の死

人が生きているとき、一方で細胞は死に、一方で細胞が生まれてきます。生と死はウラ・オモテの関係です。このような細胞の生と死は、細胞の中の遺伝子の中にプログラムとして組み込まれています。

II. 自然な老化と不自然な老化

老化には、自然な老化（生理的老化）と不自然な老化（病的老化）があります。寿命は自然な老化によって決められています。不自然な老化がその人の寿命を短くします。

III. 不自然な老化（病的老化）

(1) 生活習慣病など

(2) いわゆる老年性痴呆

- ① 血管性痴呆 ② アルツハイマー型痴呆

IV. 上手に年をとること

(1) ストレスの解消

- ① 無理をしない ② ありのままに自然に生きる
- (2) 自分の暮らしている所で共に生きる
- (3) 一回きりの自分の人生
- (4) 自然の中で生かされている

8月23日

環境問題と私たちの暮らし — ダイオキシン問題、地球温暖化を中心に —

上村雄彦

・ダイオキシン

塩化ビニールなど有機塩素系プラスチックを燃やすと猛毒のダイオキシンが発生、先進国では厳しい規制（0.1ナノグラム以下）がある。日本はその800倍（80ナノグラム以下）という甘い基準しかなく、ゴミ焼却場の煙や残灰からダイオキシン汚染が広がっている。不妊、奇形、精子の減少、アトピー、アレルギーなどの危険が指摘され始めた。厚生省は「5年後に10ナノグラム以下」と、極めて甘く遅い対応。塩化ビニールの製造の規制や、焼却場と残灰処理場の厳しい規制が不可欠。

・地球温暖化

国連IPCCは「CO₂増加のため地球の温度は100年で2～3度上がり、海面は50センチ上昇、40か国の国土の大半は水没、農業生産に大きな打撃。早急にCO₂を60～80%削減しなければならない」と警告。原因は電気、ガス、自動車等の使用増加によって、CO₂排出量が増えていること。その排出量は経済レベルに比例。途上国の数十倍のCO₂を排出している先進国は1/10にしなければならないが、昨年地球温暖化防止京都会議では各国の利害対立と現状の認識不足のために「2010年までに先進国は5.2%削減」にとどまった。温暖化を防ぐためには、現状の無駄の上に成り立っている消費経済を根本的に改め直す必要がある。

10月11日

国際政治経済の変動

大村喬一

世界中の国や地域において予測できないような事態が日々発生している。このような事態に対して、これまでとられてきた国際問題の処理方法が有効なのかどうかは今問題になっている。これは通信技術、運輸出版の発達や世界の相互依存度が増大することによって生じた質的な変化であり、これまでの国家中心の国際システムが、多国籍企業や個人の能力拡大によって多中

心的システムに移ったことから生じたものである。

12月6日

平城京と寺々

水野正好

東大寺や法華寺など「国分」と「総」の二つの性格をもって営まれた官の大寺。女帝自ら建立した西大寺、長い伝統をもった元興寺の移建、時めく権力者藤原氏の営む興福寺、それぞれの寺の歴史には興味深い背景がたどれる。こうした寺の歴史の一駒一駒を寺坊の世界から光をあて具体的に語り上げることは極めて大事なことであったと考えた。また、こうした伽藍の中から誕生してきた僧侶や外国より請来された僧、或いはそうした僧を招く目的をもっていた遣唐使派遣。また、こうした寺院の中から醸し出された“極楽世界”や“舍利信仰”、ひいては、“救済・智識”といった各種の思想についても、寺坊のデータの上になって具体的にその姿を描き出すことにつとめた。

2月21日

もう一つの細道

— 板木の旅路 —

永井一彰

芭蕉の代表的紀行文。『おくのほそ道』に描かれる旅人の姿は、大層感動的である。その旅人は旅を生業とした芭蕉の写し絵でもあった。ところで、昨年奈良大学が購入した約五百枚の板木の中から発見された『おくのほそ道』の板木の旅路も、芭蕉の旅に劣らず感動的である。『おくのほそ道』の板木は全部で十五枚あったと考えられるが、発見されたのはたったの一枚。最終的に奈良大学に落ち着くことになったその一枚の板木がたどって来た旅路をさかのぼることによって、芭蕉という利権が江戸時代の本屋にどのように扱われて来たのかを考えてみた。

奈良大学文化講座

まちをつくる・まちをまもる
— 世界文化遺産のあるまち・奈良 —

9月19日

大仏炎上と平重衡^{しげひら}

長坂成行

聖武天皇の時代に国家的大事業として創建され、天平勝宝四年（752）に完成をみた東大寺大仏殿は、平安時代末、源平争乱の中に焼失した。全盛を極めた平清盛による支配もようやくかげりをみせ、以仁王・源頼政の反乱について、伊豆では源頼朝が挙兵する。そうした中、奈良の東大寺・興福寺の勢力も平家にとっては危険分子であった。清盛は四男重衡を大将とする南都討伐軍をさし向け、その夜戦の明かりのために出した火が東大寺に移り、南都の大寺は炎上した。治承四年（1180）十二月のことで、「平家物語」は巻五「奈良炎上」の一章を設けてこの末法の具現を嘆いている。当事者である平重衡は一谷の合戦で捕らえられ、ついには木津川のほとりで処刑されるのだが、その描き方には大仏殿焼き討ちの仏罰という意識が底流しており、大仏炎上をもたらした波紋を『平家物語』の内外に探してみたい。

9月26日

もう一つの世界文化遺産のまち・パルミラ
— 貿易に生きた隊商都市の光と陰 —

泉拓良

パルミラは中東シリア砂漠のほぼ中央にあり、文明の母なる大河ユーフラテス川と、現存する世界最古の都市ダマスカスとの中間、それぞれから200km以上離れた砂漠のオアシス都市である。この都市は、紀元前1世紀から273年まで興隆を極めたが、その後は歴史から忘れ去れ、砂に埋もれてしまった。その衰退の原因は環境という自然の変化ではなしに、貿易ルートという人為的なものの変化であった。歴史に翻弄された都市の姿を説明する。

10月17日

ならのまちづくり — 町並み保存とならの活性化 —

實 清 隆

奈良には3つの誇るべき顔がある。古代平城京時代の顔と中世の奈良町郷の顔と現在の世界的文化・観光都市としての顔がある。平城京は、最近、朱雀門、東院庭園、更には大極殿の復元の予定など刮目すべき成果が出だした。だが一面、車の排気ガス等による大気汚染で東大寺、興福寺などの文化財の腐食、更には飛火野、奥山の原生林の立ち枯れの進行が著しい。

奈良町については、その居住者の高齢化も著しく、相続の際にその屋敷を他人に売却される事が多く、伝統的な中世の佇まいがマンションや駐車場に急速に化けつつある。そこで、このような状況をどのように保存すべきか提言した。

また、最近、国際観光都市としての奈良への観光客数の減少、地場産業の衰退などに悩んでいる。ここに、国際・文化・観光都市としての奈良をどうすれば蘇生・活性化できるのか、演者の欧米留学での経験もまじえ具体的に提言した。

10月24日

弥生時代のまちを語る

酒 井 龍 一

- (1) 奈良県田原本町に所在する有名な唐古鍵遺跡は、弥生時代（概ね紀元前300～後200年）における、畿内地方で最大規模の集落であった。弥生社会全体には、西の北部九州と東の近畿中央の二ヶ所に大社会があり、いわば両極構造となっていたことが基本的な特徴であった。
- (2) 北部九州社会は先進世界たる朝鮮・中国世界と対面し、畿内社会は伝統世界たる縄文世界と隣存するという地理的条件にあった。唐古鍵は、後者のまさに中心となる大集落であった。
- (3) 近年、弥生時代に関する「都市論（日本的な意味での）」が活発になってきた。重ねて言うと、弥生集落の「都市的性格」の論議・究明する試みが多くなってきたのである。
- (4) 同時に、各集落の生産—消費状況、各集落を連結する交通路、人・物・情報の移動状況、あるいは弥生社会の仕組や階層性などの論議・究明も活発となってきた。
- (5) 今回の講義は、弥生集落と弥生社会の仕組を、その「都市的性格」をキーワードとしながら、解説していくことになる。

10月31日

奈良時代の遷都

— 平城・恭仁・難波・紫香葉 —

水野柳太郎

奈良時代に、我々がいうような「町」があったかどうかは判らない。しかし、一般の農村とは異なった、町らしいものがなかったとも言えない。難波・博多・敦賀などの津や交通の中心などには、町らしいものがあつたのではないかと思われるが、文献史料からも遺跡からも、その姿が知られるものはない。

京都が日本最古の都市といわれるように、平安遷都以後になると、町の姿が幾分か現われてくる。そうなるまでは、遷都が繰り返されて、都市が成長し永続したらしくはない。

未完成の都市が造られ失われて行く姿を、奈良時代の遷都から考えてみたい。

京の住民「京戸」となったひとびとの系譜も設定された土地の住民というよりも、代々京に住み京町における必要を満たしていたらしい。市で交易に従事した「市人」などもそのようなひとびとではなかったろうか。

京の住民がその意志を表明したのは僅かに紫香葉宮が崩壊した時であった。

社会学部公開講座

平成10年度の奈良大学社会学部公開講座の共通テーマは、「これからの日本を読む！」というテーマで3回にわたり、すべて奈良県中小企業会館にて開くことができた。

混迷する現代社会の中で、社会学部の3名の研究者がそれぞれの研究分野に関わる専門家や研究者を交えながら、21世紀に向かうわが国の方向性のあり方について、その研究成果と内容をわかりやすく市民に提供することができたように思われる。

第1回目は、8月8日(土)、「超高齢化と『まちづくり』」というテーマで、今問題となっている「公的介護保険」と「NPO(市民活動推進)法案」についてわかりやすく市民にその問題点と課題を提供することができた。講師にNPO政策研究所代表幹事の木原勝彬氏をお呼びし、今なぜNPO法案なのかをわかりやすく説明を受けることができた。また桂からは、公的介護保険のポイントを出来るだけ事例にもとづき超高齢化社会で、介護が社会化され豊かな老後が送れる社会づくりの重要性について話を行った。参加者は41名で、高齢の女性の参加が目立った。

第2回目は、9月12日(土)、「この社会の中の青年期」というテーマで、社会学部遠藤由美助教授を中心に、京都大学保健管理センター講師の杉原保史氏を招き、今の青年期の特徴や特に若い人々の不安や悩みの中味について実際の臨床事例を交えながら、わかりやすく説明を受けることができた。参加者は38名で、そのなかには、実際に児童相談所でワーカーの仕事をし

ている人々はじめ、電話相談や高等学校等で若い学生と関わっている先生たちも参加し、両氏の話に聞き入っていた。現場の事例と大学での研究成果をわかりやすくつないだ講座であったように思われる。

第3回目は、10月17日(土)、今度は21世紀の日本社会のなかで、産業構造に注目した講座で、「新産業の創造と中小企業」というテーマで、本学助教授の太田一樹氏を中心に、大阪府産業開発研究所主任研究員の江頭寛昭氏をお招きして、これからの新たな次世代に向けた産業分野の方向性について有益な話を伺うことができた。江頭氏からは、中小企業の取り組み状況について最新の調査結果をふまえながら、具体的な中小企業の状況や課題についてわかりやすく話しを伺うことができたように思われる。参加者は当日は悪天候とも重なり、参加者は14名と少なかったが、熱心な企業関係者が質問を多く投げかけて、熱のこもった講座であった。

どの講座も熱心な討論と質疑応答があり、有益な成果を得ることができたように思われる。まったく異なったフィールドから21世紀のわが国の方向性を探る意味においてはそれぞれの講座の特徴があるもののそれぞれ現代社会を見つめる視点を提供することができたのではないかと考える。3回連続で出席した市民もあり、このような講座がもっと開かれ、奈良大学の社会学部の研究者の動向や成果を市民に提供してほしいという希望があった。

この社会学部の公開講座は、上記に示した参加人数の他に、多くの学部学生がボランティアとして参画しており、学生も半日市民とともに学習する機会が与えられたことも成果として記しておきたい。各講座の準備やレジメ等の配布、当日の受け付けやお茶の接待もみな学生たちによってなされた。

最後にこの公開講座を開催するにあたり、中小企業会館、大学事務局はじめ、総合研究所のご協力に対し謝意を表したい。

(文責 桂)